

「もう一つの俳句の国際化」

鷹羽狩行

鷹羽でございます。第17回総会ということ、数字がまず気に入りましたね。これはだれにも譲れないという数です（笑）。

まず、講演の前に俳句用語の整理をしておきたいと思います。「俳句」、これは我々日本人が国内でつくっているもの。「海外俳句」、これは日本人が海外旅行でつくった俳句のことです。このほかに、後ほどお話ししますが、外国に滞在してつくっている俳句、「在外詠」という俳句用語ができました。

それから、「海外のハイク」というのがあります。これは外国人が母国語でつくる俳句のことを言います。例えば英語の場合は「英俳」、漢語のが「漢俳」などが、それです。今日はその中の海外俳句と在外詠のあれこれについてお話をさせていただきます。

「俳句ブーム」という言葉があります。先月、浜松学院大学に講演に参りました。そのときは200人ほどの会場に250人という盛況で、学長さんがあいさつの中で、俳句ブームというのをさながら目の当たりにするようです、といわれました。この俳句ブームというのは昭和30年代からのことで、今も続いている。半世紀も続いているということは、もはや俳句はブームではなくて、言うならば「俳句の時代」ではないかと思います。

その一つの根拠というわけではありませんが、毎年、新年にNHKホールでNHK全国俳句大会が開かれております。3000人入る会場がいっぱいなんです。大みそかの紅白歌合戦の場面を想像していただければわかるかと思いますが、紅白歌合戦と違うところは歌手対観客という構図ではなくて、3000人すべてが俳句のつくり手であるという、こういう文芸のありようは、世界に例がないのではないのでしょうか。紅白歌合戦は国民的行事と言われておりますが、それならば俳句大会は国民的文芸の祭典と位置づけていいのではないかと思います。

その俳句が、国内ばかりか世界へ広がりつつある。先ほど木暮会長の言葉

にありましたように、50 か国 200 万人という数字が挙げられました。まず、欧米で 20 世紀の初頭から俳句が紹介されはじめましたが、盛んにつくられるようになったのは戦後のことなんですね。日本の経済的な発展、国際的な地位の向上によって企業の進出、政府間交流、留学ということがあり、海外に滞在する人がふえた、また観光旅行をする人もふえ、海外で俳句がつくられるようになりました。海外俳句という用語が初めて登場したのは角川書店の『現代俳句辞典』（昭 52）であります。

これも先ほど会長から〈摩天楼より新緑がパセリほど〉が海外俳句の草分けだにご紹介いただきましたが、この俳句用語が生まれる以前の戦前にも作品はあります。

まず正岡子規に今から 110 年前の明治 28 年、日清戦争に従軍したときの〈永き日や驢馬を追ひ行く鞭の影〉という句があります。その 7 年後の明治 35 年には夏目漱石がロンドンで〈露黄なる市に動くや影法師〉をつくりました。漱石の 20 年後の昭和 11 年に、高浜虚子がヨーロッパ旅行でいくつかの句を詠みました。その当時は海外俳句の名称はなかったのですが、これが海外俳句のはしりであります。

一方、外国人が母国語で俳句をつくるのが盛んになり、それを「海外のハイク」と言うようになりました。主として欧米ですが、昭和 55 年には中国で「漢俳」が誕生しました。第 1 回俳人協会訪中団が北京を訪ねまして、林林先生を初めとする作家、詩人たちと文化交流をしました。日本からは私も含め 21 名が参加、団長が大野林火先生でありました。その 25 年後、去年のことですが、漢俳学会というのが設立されました。

俳句の国際化、国際交流というのが盛んになりましたのは、昭和 50 年から 60 年代にかけてでありまして、その結果と言っていいでしょうか、平成元年 12 月にこの国際俳句交流協会が設立されたのであります。そして、より一層国際的な活動、シンポジウムや日米俳句大会、日独俳句大会、講演会を開いたり活発になってまいりました。一方、海外へ吟行する人も多くなり、団体や結社で海外吟行が行われ、海外俳句が激増したとっていいのではないかと思います。

一つの具体的な例を挙げましょう。昨年、私はチュニジアへ NHK 学園海外スクーリングの講師として出かけました。チュニジアは、アフリカの北部

にあります。このNHK学園海外スクーリングというのは平成6年からで、もう10年以上やっているわけですが、なぜチュニジアを選んだかという、私がアフリカだけまだ行っていなかったから……。これで一応、五大陸の地を踏んだことになります。

チュニジアは日本の国土の半分しかありません。しかし、北部地帯には世界遺産が七つありますし、紀元前からの歴史と文化のある国なのです。南のほうはサハラ砂漠の一部になっています。

一行は29名、ほとんどが60代から70代、50代が2人、80代が2人、平均年齢がちょうど70なんです。癌という方が2人おられました。しかも、お2人とも余命3年と言われながら5年になります、こうやって元気で旅行に出られるのも俳句のおかげではないかというお話をされました。俳句が生きがいということでした。また、つえを持った方が2人。句歴はばらばらで、初心者から句歴何十年というベテランまでいらっしゃいました。これはまさに2000万と言われる俳句人口構成の縮図ではないかと思いました。

全行程11日間、句会を2回やります。貸し切りのバスの中で一口講座と称しまして、質問に答えたりします。

成田を出発するとき海外俳句の心得を一つだけ言いました。今は2月で春だけれども、春という季語にこだわってはいは海外俳句はつくれません。現地で見たり聞いたりしたもの、いつの季節感を感じたかということをつくってほしいと。——年末年始の休みにハワイへ行って冬や正月の句をつくる人はいないでしょうと……。それを今回の吟行会では見事に生かしてくれましたね。

第1日目はカルタゴ遺跡へ参りました。2800年前にフェニキア人によって建てられた植民都市であります。海外貿易で栄えましたが、ローマ帝国に滅ぼされること3回、最後には二度と立ち上がれないようにということで、塩までまかれた。そこには古代カルタゴの軍港とかローマ支配時代の共同浴場などの跡が残っています。廃墟にはタンポポとかクローバーの花があちこちに咲いておりました。

〈そのかみのカルタゴ知らずお花畑 田中喜美子〉——「そのかみの」は昔々のということ。カルタゴの悲惨な歴史は知らないが……というのが上五です。クローバーやタンポポが咲いているところを「お花畑」と言ったとこ

ろが見事ですね。これは夏の季語で、高山植物が群がり咲いているところをいう。「そのかみのカルタゴ」と「お花畑」。つまり、戦争と平和というようなことまで象徴している句ではないかと思います。これは夏の句。

2日目は暴風雨でした。目を覚まして窓から見ると、ヤシの並木が倒れんばかりの風と雨。私は実は雨男なんです（笑）、昔は嵐を呼ぶ男と言われていたぐらいなのです。尋常の雨ではない。このツアーがもし普通の観光客のツアーならば、今日はもうやめておきましょうということでしょうが、ホテルのフロントには、もう全員雨具の装備をしてバスに乗る支度をしているのです。これには俳句仲間のきずなの強さを感じました。

訪ねたところがドゥッガ遺跡で、広大な丘の上にあるんです。雨風を突いて全員が上りました。丘の上に上ったのですが、ものすごい風と雨です。傘を差していった人は傘がおちょこになって骨だけになり、私の借りた雨ガッパはびりびりに破れておりました。ガイドが「ここを風の丘と呼びます」というので、話がちゃんと一致している（笑）。

多くの遺跡の中に円形劇場がありました。ガイドが音響効果を確認してみてくださいというので、みんなが手をたたいたわけですが、なるほどそのこだまが返ってまいります。雨の中で聞くそのむなしいこだまが、かつてはさぞやということをおぼせてくれました。こういう句が出ました。〈冴して円形劇場冴返る 渡辺トヨ子〉。——「冴返る」は春の季語です。春でありながら冬を思わせるような寒さがぶり返す、ちょうどその季節の季語とはいえ、見事に廃墟のむなしさを生かしているように思いました。

サハラ砂漠の入り口といわれるドゥーズにも1泊しました。全員がラクダに乗って、夕日が沈むところを楽しみました。

砂漠ですから、夜になると人工照明が全くないわけです。星の輝き、大きさ、これはもうまるで宝石をぶちまけたような明るさでした。そこで出た句が〈手に触れんばかり砂漠の星月夜 渡辺民子〉——「星月夜」は秋の季語です。月は出ていないが、星空がまるで月夜のように明るいというところから秋の季語になっています。これはやはり東京のような都会では体験できないことで、「手に触れんばかり」というのも大いに納得させられました。

以上のように、夏と春と秋の句が出ましたが、アフリカで冬の句が出るとは思いませんでしたね。今も穴ぐらに住んでいるベルベル人のマトマタとい

う町で一泊しました。もちろん穴ぐらです。四つ星ホテルですが、横穴には違いなく、それがホテルの部屋になっている。くりぬいた横穴の天井から床まで白いペンキで塗られて、中にぽつんと白いベッドが置いてある。寒いんですね。もちろん暖房設備もありますが、全くきかない。

そこでの作が<洞窟の一夜をともに雪女 熊倉美子>というんですね。これは体験のない人には少し通じにくいかなと思いますが、なるほど、真っ白い空間の中の真っ白いベッドの上で、一人ぽつんと寒々と寝ていますと、雪女と一夜を明かしたような、そんな感じでした。その大胆な発想がおもしろい。その作者は今日会場にお見えですが、作者のお名前が「熊倉」というのもいいじゃありませんか（笑）。

というわけで、私が成田空港の出発のときに言いました春夏秋冬の季語を見事に皆さん使い分けられた、これには感心しました。移動バスの中で一口講座や質疑応答の様子を見て、旅行社の添乗員2人も俳句の熱気に巻き込まれてというか、巻き込んでといたしますか、句会に参加してもらいました。

ところが、添乗員は今まで俳句をつくったことがありませんから、その差は明らかなんですね。「夏の朝顔を洗ってパン食べた」式（笑）。それがどうしたという以外に言いようがありません。そうしましたら、添乗員の一人がやってきまして、先生、「どうした」というのを俳号にいただけませんか（笑）。それは結構だ、お堂の堂に、上下の下をつけて「堂下」では、どうでしょうと……。

俳句というのは見よう見まねですぐ輪の中に入っていける、ちょうど盆踊りと同じようなところがありますね。しかしそのペンネームは失敗でした。次の句会では、私が「それがどうした！」と言う前に、作者が「堂下」と名乗りを上げてしまう……（笑）。おもしろい吟行会でした。

チュニジアを離れるときに、11日間現地を案内してくれたチュニジア人の女性ガイドが、私もできましたからと言って、短冊に一句、たどたどしい平仮名ばかりの句を渡してくれました。<じんせいもしんきろうのようにきえます サイーダ>——この女性はバスの中での一口講座を聞いていたんですね。前方に蜃気楼があらわれたときに、私があれば春の季語になっていますという話を覚えていてくれたのでしょう。

外国の人が日本語で、11日間のガイドの中で<じんせいもしんきろうの

ようにきえます>は見事ではありませんか。帰りの飛行機の中で私は、小さな小さな一粒ではあるが、結果的に俳句という種をサハラ砂漠の中にまいて来たのかなと思いました。

このチュニジア吟行、最初に私は日本の俳句人口2000万の縮図だと申し上げましたが、そのガイドさんのことを考えると、これは俳句の国際化、交流の一端を担ったのではないかと思ったのであります。

さて、海外俳句のほかに在外詠という俳句用語ができました。平成7年に角川書店から出ました『俳文学大辞典』の中に入っております。それだけ国際化が進んだということですね。そこには「日本とは異なる気候、風土、生活慣習に深く根をおろした海外生活者としての俳句」と解説されています。しかし私はそうした俳句は、旅行者の目でもとらえられるし、海外俳句はそうでなくてはいけないのではないかと思います。長々しい片仮名の地名の後に「夏の月」とかいうのではだめで、なるべく片仮名語を使わないで、ポエジーを中心に詠むべきであります。

在外詠について、二つの体験があります。まず大人の在外詠。私はNHK国際放送（ラジオジャパン）の「俳句コーナー」を昭和62年から14年間担当しました。毎週土曜か日曜、海外から寄せられた俳句の選評と一口講座という内容の番組で、応募句は圧倒的にブラジルが多かった。そして平成8年5月にサンパウロへ番組作りに出かけました。サンパウロでリスナーによる俳句大会に集まった人700名。

私はブラジルへ行ったことがないものですから、投句に出てくるものの実物を見ることができるということで喜んで参りました。片道24時間、アマゾン川も、イグアスの滝も見ることができ、広大な牧場、コーヒー園は……と期待して出かけました。行ってみると何とブラジルは日本の23倍の広さの国であります。

そこで、ラジオジャパンに投句のされた一句を思い出しました。<掛乞も国広ければ飛行機で 佐藤孝子>。——「掛乞」というのは「掛取」ともいい、売掛代金集金のことです。昔は年1回集金する、あるいは盆暮れの2回に分けて集金するという習慣があり、年末のほうは冬の季語になっていました。もう日本ではほこりをかぶった季語で、こういう句をつくる人はありません。しかしブラジルでは掛乞とか四方拝という季語を使った投句がありま

した。

日本では使われなくなった掛乞の季語が、外国の地にあって現代に生かされ、しかも俳諧味豊かな一句になっていると思うんですね。“集金も国広ければ飛行機で”ではおもしろくも何ともありませんが、それを掛乞といったところに笑いが生まれました。こういうのが在外詠です。

子供たちの在外詠はどうでしょう。海外子女教育振興財団というところで年1回俳句のコンクールがあります。俳句以外に作文や詩などもあります。私は昭和61年から俳句作品の選考委員をやっておりまして、毎年1万句前後、去年は1万2000句余の応募がありました。世界に日本人学校が約300、そこで勉強している小・中学生が約5万6000人、その子供たちが寄せる俳句は在外詠そのものだと思いますね。これがまたいろいろなことを勉強させてくれます。

〈ロンドンの町全体が花畑 鳴原果映〉——長い長い冬が終わったかと思うと、春と夏の花がいつぱんに開く。メイフラワーという花の種類もあるようですが、5月ごろに咲く花の総称でもあるようです。ロンドンの町全体が花畑だというのは、人通りから見えるようにということで、玄関とかベランダや窓辺に花の鉢を置いて美しく飾るわけです。ヨーロッパへ行かれた人はご存じと思いますが、まさに5月ごろの風景は「ロンドンの町全体が花畑」ということになろうかと思えます。「花畑」は秋の季語ですが、子供はそんなことは考えていないでしょうね。

〈花よりも長生きしてねお母さん 吉田宮土理〉という句がありました。この子供、ひょっとして林芙美子の「花の命は短くて……」を知っていてつくったのかと思うような句です。お母さんは花のように美しい、でも花のようにしおれないで長生きしてくださいという。「花」といえば、歳時記では桜のことになりますが、5月第2日曜の母の日の句と解釈もできましょう。赤いカーネーションに添えた句として味わうこともできます。

〈赤道をトンボが一匹横切った 小牧朋広〉——なかなか大胆な発想ですね。安西冬衛の「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った」という詩を思い出させます。「赤道をトンボが……」と言われると、赤道という赤い一本の線が見えてくるような錯覚を起こさせます。トンボといえば秋ですが、この句の季感は夏ですね。

つまり、「世界歳時記」というものが将来できるとすれば、この子供たちはそれを先取りして例句をつくってくれているのではないかという感じさえしてまいります。これらが在外詠の子供編であります。

ただ、国際化といいましてもいろいろ問題点があります。私に<みちのくの星入り氷柱われに呉れよ>という句があります。いつでしたか、フランスの有名な出版社から、あなたの一句を本の中に載せたいので許可を得たいといってきて、フランス語訳が付いておりました。私はフランス語わかりませんので、俳人協会国際部長の星野恒彦さんに相談したら、これはマブソン青眼さんに見てもらったらいいということでした。

「氷柱」が鍾乳石という訳になっていたんですね。マブソンさんがこうしたらいいでしょうと二つの案を書いてくださったので、それを出版社のほうに送り返しました。

でき上がって本が届きました。直っていないんですね。ここが国際化の難しいところで、翻訳者のプライドなのか、あるいは国家の威信にかかわるといったことなのか……。

そう思ったのは、私の俳句を中国の李芒先生が翻訳してくださった。先生が漢訳したものを送ってこられまして、これでいいかどうか、よろしくご叱正願いたい。最近作を少し加えたいので、一応でき上がったところまで目を通してください、ということでした。私は漢詩がわかりませんので、「山火」同人の漢詩に詳しい小川斉東語さんに見てもらいました。解釈の違いがいくつかあって、こういうふうにしてほしいと書いて返送しましたら、李芒先生からの返事は、やはり私のとおりでいきますと（笑）。

フランスと中国の例を挙げましたが、フランスではそのほうが通じるのか、中国ではそのほうがいいのかなと思い、歴史や文化の違いというものを感じました。国際化というのは大変だなと……。

それから、イタリアへ行きましたときは、バチカン大使だった荒木忠男さんのご厚意で「日伊俳句交流の夕べ」が開かれ、大使館で歓迎してくれました。そのときに私の3句を日本人が作曲し、日本人が歌う、そして同じ句をイタリア語に翻訳し、イタリア人が作曲し、イタリア人が歌うという俳句による音楽交流が行われました。その中の、「落椿われならば急流へ落つ」の椿が、イタリアの人にとってはカルメンの赤いバラのイメージになってしま

うんですね。そういうズレがありました。

そういえば、平成元年に出ましたジャック・スタムの『英訳 狩行俳句抄』の中の〈うすものの中より銀の鍵を出す〉の「うすもの」が、ガーゼと訳されていました。

俳句文学館にインド日刊英字新聞の編集長が日本文化の実情視察ということで見えたことがあります。星野恒彦さんと2人でお目にかかったのですが、俳句を何も知らない外国人に一から説明するにはどうしたらいいだろうと考えているうちに、そうだ、星野さんとエイドリアン・ピニングトンさんが共訳してくださった私の英訳句集があることを思い出し、図書室から持ってきて見せましたところ、初めてその記者がにっこりと笑いまして、俳句はすばらしいと……。どの句ですかと言いましたら、〈沐浴のなかの一人が泳ぎだす〉というんですね。

日の出を見ようと暗いうちからガンジス川へ出かけると、岸辺だけではなく、川に入って髪を洗い、身を浄めてお祈りをしている人びとがいる。かと思うと、洗濯をしている人もいる。そのうちに泳ぎ出した人がいた。神聖な祈りの最中に何たることを……というつもりでつくったのですが、インドの記者の解釈は、そうではない。日の出に向かって泳ぐということは、より信仰を深めることであると。国際化というのは大変だなと、そのときも思いましたね（笑）。

以上の例でもわかるように、俳句の国際化には翻訳という大問題があります。翻訳することによって誤解やら解釈の違いが生まれ、ときには、つまらない俳句が訳によってよくなるという例もあるのではないのでしょうか。日本語自体として問題であると思われるものも、英訳、漢訳すると見事なものになってしまうことがありますね。

平成元年にこの国際俳句交流協会ができました。活発な活動を続けていますが、そのきっかけというか土台になっているのは海外俳句、在外詠ではないかと思うんです。この協会がやっておりますいろいろな行事、例えば国際俳句に関する資料の収集整理、国際組織の連携拡充、あるいは世界諸地域との多角的交流、それから日本の俳句及び俳句文化の世界への体系的紹介、機関誌などの刊行、そういう事業項目が挙がっておりますが、こういう事業内容を見ますと、一部の専門家の人たちのものだという印象が強いわけですね。

外国語が対等に話せて、文章が書けて、その上ポエムのことまでわかって文章が書けるという人は、わずか一握りだと思います。

事業項目の中に海外俳句、在外詠という言葉は一つも出てきません。実はこれらが土台にあって、協会という建物が建られたのですが、建物のほうだけが大事にされて、土台のほうが少し忘れられているのではないのでしょうか。

海外俳句とか在外詠という、こうした裾野の広がりなくしては、俳句の国際化という花は咲かないのではないかと私は思います。本日の話のタイトルを「海外俳句について」とすれば済むところを、あえて「もう一つの俳句の国際化」としたのは、海外俳句、在外詠という根本的なものにもっとスポットを当て、これをどう位置づけ集約していくかが大切ではないかと思ったからであります。

世界にまで俳句が広がっているというのは、単に経済大国の副産物のように輸出されたのではなくて、この詩型自体が優れていたからです。瞬間を永遠のものとする、まことに深い働きのあるすばらしい文芸だからです。

コロンビア大学のハルオ・シラネ教授が言いました。「俳句の偉大さとは、絶えずあらたな複数の解釈を生み出すことにある。こういう幅広い読みを許す形式は、他にない」と。そういう世界に誇ることのできる文芸に私たちは携わっているということ、これを大変幸せに思い、誇りたいと思います。

俳句の国際化を、より進展させるために、海外俳句や在外詠の扱いを見直し、それらの作者にぜひ参加してもらい、もっと協会の輪をひろげていただきたい、というのが私のお話ししたかったところでもあります。

12時30分までと言われましたが、30秒ほど前ですので、これで終わらせていただきます（笑）。ありがとうございました（拍手）。

（第17回 HIA 総会特別講演より）

（2006. 6. 6）